

## 第一章

幼い頃からの幼馴染は少しずつ姿を変えて行ってナツキは女の子みたいな名前なのに、少しずつ背が伸びて、ずっとずっと男の子になって行くのに僕はずっと変わらなくて、ユキはずっとずっと可愛い女の子になったと言うのに、僕は変わらなくて、それでも、それが普通だと思った十五年間と少し、鏡を見ても僕はやっぱり僕のままだった。何も変わらなくて、何も変わって居なくて、何も変わらないまま、僕はこの地獄を歩いて行く……。

僕たちは十五歳になる頃に性別が決まる。

十五歳までは僕達に性別はなく、どちらも性別でも良いように僕たちはどっち着かずの名前を授かるのだが、それでも、ナツキの名前は何処か女の子寄り、ユキも女の子寄りだった。だから、親は女の子を望んで居たのかも知れないけど、このヒバリと言う名前も、もしかしたら僕の両親も女の子を望んで居たのかも知れない。

僕達に生まれ持った性別はない。

昔は性別があったらしいが度重なる災害と感染症で人はいつしか持って生まれるべき性別を母親の胎内か、もしくは千年前の地球に置き忘れて来てしまったらしい。

突然生まれた性別無き赤子から、その後世界は少しずつ性別を淘汰していった。正確には生まれて持つべき性別だけを淘汰された世界が広がった。それが、神様のイタズラなのか、あるいは気まぐれなのか、もしくは神様すら予期していない事象なのかは僕達では知る術はないが、それでも確実なのはこの世界に性別が存在しないという事。それでも、十五歳までには男か女かが決まるので、あまり取り立てて騒ぐ問題でもなく、人はこれを受け入れた。

でも、僕はずっと男にも女にもなれない中途半端な性別だった。

男のアソコもなく、女の子としての胸もなく、僕はずっとこの世界にひとりきりだった。

それでも、幼馴染は僕と変わらず付き合ってくれるので、僕はそれが幸せだった、出来れば、この幸せがずっと続いて欲しいと願うのだけど、残念だけど、世界はそんなに甘くはなかった。

ふたりは変わって行く。

ナツキは夏樹になっていき、身長も伸びて男らしくなっていく。

ユキは雪穂って名前に変わって、女の子らしく胸が大きくなって行って、少し可愛くなった。

カッコ良くなった幼馴染と可愛くなった幼馴染。

でも僕はずっと性別がないんだ。

顔立ち中性的なままだし、身体の線は細くとも、そのまま真っ直ぐになっていると言う感じだし、身長は伸びないし、色素はアルビノのように薄く白い肌だった。

でも眼は赤くはないし、黒いし、髪も黒く、腕は細い。

それが僕の身体的容姿だ。

アルビノじゃないのに、よくアルビノだと思われる。

アルビノとは色素が薄いと言うよりも、ほぼない人の事で、髪は金髪で白い肌をしていて、目が赤い人の事をアルビノだって言う。

黒人でも白人のように肌が白くって、逆にメラニノは色素が濃い人の事を言う。

▽

「最近学校はどうなの？」

僕の主治医、中村先生はいつものようにそう訊ねる。

彼は四十代の医師だ。ずっとずっと僕の身体を担当していて、僕の健康を管理している。

とは言っても僕は不健康じゃない。至って普通だし、体育の授業にも出れるし、入っていないけど部活も出来る。それでも、彼が僕の健康を管理するのは、僕がずっと、そう早い子では十歳の頃から性別が出来てるのに僕には一向にその傾向が見られないから、心配した両親が僕を医者連れて行ったのが、彼との付き合いの始まりだ。

「普通ですよ」

「そうやって、今の子達は秘密にするんだから、僕は悲しいよ」

全然悲しんでいる様子はなかった。

「僕に泣き落としは効きませんよ。てか本当に普通なんです。何も変わらないから、何かを話す事もないですし、そんな事を聞いても面白くないでしょ？」

「そうかな？　僕はもう高校生じゃないから、高校生の話を聞くのは結構楽しみではあるよ」

そこで中村先生は少し間を置いて僕を見た。

「それこそ、好きな子は出来たの？　それとも好きな男の子かい？」

中村先生は言う。  
僕は何故か夏樹と雪穂の顔が浮かんだ。  
何故か胸が痛んだ。

▽

「おい、ヒバリ！」

夏樹が僕を呼ぶ。  
彼は怒ったように僕を見ていた。「なに？」と僕は応えると夏樹は呆れたように溜息を吐いた。

「なにじゃねえよ！ 遅刻するぞ！ なにボーとしているんだよ」  
「ごめん」

僕はそう言うと夏樹は僕の頭を撫でた。同級生なのに僕を子ども扱いする。彼の方が背が高いからだ。

「ヒバリは朝が弱いからよ。夏樹と違ってね」

そう言うのは雪穂だ。少し化粧をしている。ふたりは何となく付き合っているのかなと思うくらいに仲が良い。  
それを良いなあとは思うけど、やっぱり僕は恋愛と言うものがよく分からなかった。

「てめえ、雪穂。それは俺が短気だって事か？」  
「あら、そんな事言っていないでしょ？」  
「暗にそう聞こえたんだがな？」  
「あら、そう？ あ、それより、ヒバリ！ 今度商店街に美味しいパン屋さんが出来たの！ 放課後行きましょう！」  
「おい、てめえ、ヒバリに抱き着くな！」  
「あら、ヒバリはあなたのものじゃないでしょ？」  
「雪穂のものでもないだろ？」  
「私のモノよ！」

そうなの？

「おい！」

そう言って夏樹は僕の腕を引っ張る。

「俺のだ！」

「いいえ、私のよ！」

「ちょっと、ふたりとも！」

幼馴染ふたりの間で僕はまるで運動会の綱引きのように両サイドから引っ張られていた。

△

「もう、ふたりともやめてよ！」

そう言って僕はパジャマのままベッドから起きた。

まだ少し冷たい朝の薄い光がカーテン越しに差し込んで居て、部屋は少し寒い。

まるで、冬の冷たい水を押し当てたかのような気温に僕はもう一度布団に入ろうかと思いつきながら、頭を抱えた。

「……僕はどんだけ承認欲求の塊なんだ」

## 第二章

———お前は男になるんだ。

そう父さんが言った。

———あなたは女の子になりなさい。

そう母さんが言った。

幼少期からふたりは僕が全くどちらでもないまま五歳を迎えた日にそう言うのだ。

その頃までに性別が現れている子も多いのだが、僕は全くどちらでもなかった。性別を

現すものが僕には存在せず、誰かを好きだと言う感情が僕の中では希薄だった。

それは人間失格の主人公のように人の感情が分からないのではなく、なにになにちゃんが好きだとか、何々君が好きだとか、幼稚園児によくある、よく分かって居ないけど好きだと言う感情を現すようなことが、僕には理解できなかった。

その点では僕は大庭葉蔵なのかもしれない。

人間失格の大庭葉蔵のように僕の家族仲は不和ではなかった。しかし、何処か違和感があるのだ。

僕は性別なんかいない！

それなのにみんな寄って集って僕に男になれだとか、女になれだとか言うんだ！

僕はひとりだ……。

そういう意味では僕は人間失格なんだ。

神様は残酷だ。

せっかく性別をなくしたのなら、どうしてそのまま性別をないままにしなかったんだ。

知恵の木の実を食べたから世界中の生き物に死の呪いを与えて、神に挑もうとしたらバベルの頂上から大雨を降らせて、人が一緒にならないように言葉の壁を作って、三度目には性別すらも奪い、あとは何を望むのだろう……。

もしかしたら神様は人が嫌いなんだろうあ……。

△

「どうしてそう思うんだい？」

中村先生は隣の部屋からガラス越しに言う。スピーカーから先生の声が聞こえる。僕の声はどこかにあるマイクから向こうにも聞こえる。

部屋の様子は見えないけど分かる。MRIに入る前を見た。そして、生まれてからずっと通っているような感覚のある病院だから、もうふたつ目の家のようなものだ。

家という程に気持ちの良い物ではないけどね……。

例えるなら、そうだなあ……研究施設かな？

よくあるだろう、生物兵器を扱う研究施設。

デストピアという現代小説があった。天才的な頭脳を持った孤児ばかりを集めた研究施設で、子供の脳をいじってアインシュタインに継ぐ天才を生もうと言う計画が昭和の混乱

期に陸軍の極秘施設で行われていたらしい。

戦後、その子達は自分を作った政府に復讐すべくテロを行うと言う内容の小説だ。

あの中で少年たちは施設を家だと言った。

家のない子達にとって忌むべき場所であるはずなのに、家だと称する事に僕は違和感を覚えたのだけど、分からなくもなかった。

多分コレが分からない人は満たされた人なのだと思う。

そう言えば満たされた人は音楽を聞かない。満たされていないから音楽を聞くんだと路上ライブをしていた女性が言っていた。その言葉に僕は共感した。僕は性別を含めて色々と欠落しているんだ。だから、僕は満たされていない。

「人が好きなら人を増やすように人を作るでしょ？ だから昔は性別があった。世界は男か女かのふたつだった。でも、今は性別がない人と男と女の三つに分けられた。僕はない方。

もし人を増やしたいのならふたつの世界で良いはず。それなのに三等分したのはやっぱり人を減らしたいからじゃない？」

「それは違うよ」

中村先生は言う。

「人口的にわずかにだけど男の方が多い。コレは単純に男性の遺伝子の方が劣っているからだと思われて居てね、狩猟時代にも死亡率は男性の方が多いから生き残る為にわずかに男性の人口が増えた。しかし、今は三つ目の性別が誕生した。これは、男でも女でも可能のように進化した証拠で、人類はより一層、種の保存が出来易くなった証拠だと思う。神様はきっとまだ人が好きなんじゃないかな」

「希望論ですね」

「君のもね」

中村先生はそう言う。

MRIの中で何かが回転する音がずっと響いている。僕はこういう継続的な音が苦手だ。永遠を感じてしまうからだ。人は永遠なんてないくせに永遠なんて言葉を作った。永遠の命、永遠の愛、そんなもの存在しないのにエジプト文明ですら永遠の命を持とうとしてミイラを作った。

日本も死後も生きながらにして仏に仕えようと即身仏になる高僧も居た。

存在しないから憧れるのは狂気に近い。僕には恐怖だ。

僕は終わりの方が好きだ。

どうせ苦しみながら生きるのだから、僕は終わりという希望が在った方が生き易い。

終わりを恐れる人と終わりに希望を見る僕。

どっちが真理とかはどうでも良い、これは僕の哲学だから、僕だけが理解していればいい。

### 第三章

僕は夏樹が好きだ。もちろん、それは同性なら友愛で異性なら恋愛の意味を持つかもしれない。ホルモンが男性と女性の両方がほぼ同数で分泌されて居る僕が、その異性愛的なものを正しく認識できているか、或いは感じられているかは分からないが、とにかくそう言った生物学的、医学的、哲学的みたいなものは放って置いて、僕は夏樹が好きだ。

彼の淡々とした性格が好きだし、その何でも受け入れてくれそうな性格が好きで、僕は夏樹と居るのが好きだ。

そして、同時に雪穂と居るのも好きだ。

雪穂と居ると僕はホッとするんだ。彼女は元は性別無かったのに、今では充分に女の子らしくなって、胸だって大きくなった。

僕らの性別を決めるのは好きと言う気持ちらしい。

なら夏樹は女の子が好きで、

雪穂は男の子が好きなんだ。

その違いと言うのはわずかな遺伝子の差で決まるらしい。

未だにどの塩基配列が人を人であると証明されているのか分かってないらしい。

何処まで塩基配列の情報が欠落したら人は死ぬのか分かっていないらしい。

それでも細胞の一生は決められていて、人の一生は決められていない。

いつ老衰で死ぬのか分からない。

いつガンになるのかも分からない。

人は人の寿命が分からない。だから極端に死を恐れる。

人は唯一死を恐れる生き物であり、唯一死の恐怖を克服した生き物だと言う。

「死ぬのは怖くないと言い、人は死ぬ恐怖の準備をするのです」と前に読んだその小説の登場人物は言い「だが、その準備を出来ずに死ぬ人は居るだろう」と主人公は言う。

まったくその通りだと思うのだが、主人公の言い分も分かり、彼女の言い分も分かる。しかし、どちらが正しいかと言うとまた別問題だ。

分かると言うのと正しいのは別問題だ。

生きる事に答えがない。なら死ぬのにも答えがなくって、僕らはその矛盾の中で生きている。

「生き物は進化の過程で寿命を発明したんだよ。地球が生まれて四六億年。初期の原始細胞は寿命なんてなかった。世代交代は分裂によるコピー、しかしそれでは簡単に外部の攻撃を受けやすく、また、病気になり易い。それを、長い時間かけて克服するために進化しようとした。その過程で永遠の寿命の存在が邪魔になった。死ぬ事のない細胞はやがて病気に対して絶滅しかけた。そこで生物は自分に似ているけど違う生き物を作ろうと性別を発明した。同時に寿命を作った。そこでは定期的に生物が死に、その死骸は土に還り、また別の生き物を潤す」

そう中村先生は言った。

なんと悲しい話しかと思うのだが、このシステムは画期的だった。  
死ぬから必死に生きようと思うし、死ぬから今を大切にしようと思う。

だから、僕はいずれふたりのうちどちらかに告白する気だ。  
それは性別が欲しい訳じゃなくって純粋に単純に好きだと言う気持ちからだ。

僕は夏樹が好きだ。

一人称が『僕』の僕に告白されたら嫌かも知れないが、あいにく僕は男じゃない。そして女でもないから、どちらにも性的な欲情しない。それでも、ふたりのうちどちらかを好きになる日が来ると思うと。そうしたら、きっと親友の片方は泣くだろう。

僕としては雪穂に泣いて貰いたい。

それは可愛いと言う想い以外に彼女の明るさに尊敬して、憧れて、惚れて、そして好きだと言う感情。

もちろんそれが愛とか言う感情かは僕には分らない。

僕は愛と言う言葉は知って居ても、愛と言うものを知らない。

愛と言う書き方は知って居ても、愛し方を知らない。

この言葉、誰の言葉だっけ？

とにかく僕は夏樹が好きだ。それに嘘偽りもなく、そして誤魔化しすらもなかった。

これは、僕は女になるチャンスなのかもしれない。



好きになった性別で性別が決まるらしい。  
女性を好きなら男性に、男性を好きなら女性になる。

なら、そのどちらでもない人はどうなるのだろうか。  
女性を好きでありながら女性の性別を持った人は、男性を好きでありながら男性の性別を持った人は、そのどちらかの性別を持ちながら、どちらも好きになる人はどうなるのだろうか。

この世界は矛盾だらけだ。  
何処にも答えなんてない。  
その癖に答えを知りたがる。  
人は確実な答えを求めてしまう。

やっぱり神様は人間が嫌いなんじゃないかと思う。

△

体育館で夏樹はバスケをしている。  
背の高い夏樹はコートを自由に動いている。三人にマークされているのに、ボールを奪われそうになると背を低くして、後ろに回転してから仲間にパスする。軽々とジャンプする夏樹から放たれたボールは放物線を綺麗に描き、バスケットゴールに入る。  
その瞬間、試合が終了して夏樹のチームが勝利して負けたチームは「夏樹が居るのに、勝てるかよ!」と文句を言った。確かに夏樹は強い、夏樹は自分だけがプレーするのではなく、ちゃんとチームを見て、適度にパスしたり、仲間を前に出したりして全体的なプレーを重視している。  
なんか、リーダー的な試合の仕方に僕は関心と尊敬をした。

「夏樹は良いね、運動出来て」

シャワー室から出た夏樹に僕はそう言った。  
学校指定のジャージ姿から制服に戻った夏樹に僕はそう言った。

「何だよ急に」

「だって、背が高くて運動出来て、カッコいいから……」

僕がそう言うと夏樹は少し照れたように顔を赤くしたけど、それを誤魔化すかのように夏樹は僕にじゃれる。

「そう言うヒバリだって可愛いぞ。背は低いし、色白だし、眼だって……」

夏樹はそこで言葉を止めた。

「眼だって……なに？」

僕は夏樹の言葉が知りたくて聞いてしまった。もしかしたら、聞かなければよかった事かも知れないけど、友達なのに隠し事って何か嫌だった。……ううん、僕が夏樹の事好きだから言って欲しかったんだと思う。

「いや、なんか、その……」

そこで夏樹は周囲に気を配り言う。

「その……可愛いなって」

「なんて？」

本当は聞こえていたのに僕は意地悪をした。ごめんね。

「だ、だから、その……可愛いなって」

「うん、ありがとう」

僕は嬉しくってそう呟いた。

もしかしたらニヤけてしまったかも知れない。

今鏡あったら絶対自分の姿見たくない。でも、夏樹に僕の顔見られたら恥ずかしい。どっちが恥ずかしいかと言えば夏樹に見られたのが恥ずかしいけど、その自分の顔を知らなければ何とか耐えられる。そう思うと乗り越えられる羞恥心だったが、さすがにコレは無理だった。

夏樹の顔が目の前にあった。

閉じた睫毛が意外と長いと思った。僕は夏樹と初めてのキスをした。夏樹の唇は少し暖かくって、そして柔らかくって、夏樹の制汗剤の匂いがした。

男の子の匂いだと思った。

僕には無い匂いに憧れる。

その癖に僕は『僕』って言う。

男の子が好きなら女になるはずなのに僕の心は男の子に憧れているみたいだ。同時に女の子にもなりたいと思う。結局どっちなんだと思う。

僕は心がきつと両方の性別があるんだ。

男の子が好き、でも女の子にも憧れている。

女の子が好き、でも男の子にも憧れている。

▽

「稀にあるんだよ、両方の性別が好きな人が居て。心は女で身体も女の方が女の人に恋するのもあるし、心は男で身体も男の人が男を好きになる事もあるし、その両方が好きな人も居るし、身体の恋愛と心の恋愛が違う人も居る。そして、このどちらでもない人も居る。この世界に居るとね、性別は色々あるんだと思うよ」

そう中村先生は言う。

#### 第四章

雪穂と日直の仕事をしている時だ。「最近ヒバリと仲良いよね？」

と雪穂は不意に俺に聞いて来た。俺より背の低い雪穂は少し背伸びしなげら一っと書かれた数学の式を消している。俺は雪穂の方を見ると視線に気づいた雪穂が俺を睨むに似た視線を向ける。それは睨むではなく、嫉妬的な視線だったかと思う。

「仲良いよね？」

再度、雪穂はそう言う。

俺は少しだけどうしようかと思った。雪穂もきっとヒバリの事が好きだ。しかし、それを知った所でどうしようとも思わない。悪いと思うなんてヒバリに対しても雪穂に対しても失礼だと思う。

「付き合っているからな」

俺はそう言うと雪穂は驚いた表情をした。「はぁっ」と言う息を吸う声が聞こえる。いや、声と言う表現は変だろうか。とにかく溜息でもなく、どちらかと言えば驚きの息を吸う雪穂は顔を驚きから困惑に、そして顔を紅くして恥ずかしそうに顔を隠したかと思うと「はう！」と何故か後ろを向いて表情を隠した。

俺は彼女の行動の意味が分からない。

「ヒ、ヒバリって男の子よね？」

何を訳の分からない事と思った。

ヒバリが男の訳がない。そして女の訳もない。ヒバリはヒバリでそこに性別がないのは

みんな知って居る事なのに、雪穂は忘れてしまったのだろうか。

俺が首を傾げていると「そうじゃなくって！！」と怒られた。

「ほら、ヒバリの制服って男物でしょ？ パッと見たら男の子同士だから……その…  
…」

雪穂は何だか変なことを言うのだ。

男同士だから……なに？ 別に男同士ではないだろう。見た目は男の制服だがさっきも書いたと通り、ヒバりに性別はないから男と言う単語を俺は詳しく認識して居なかった。

「だーかーら、そう言う本あるでしょ？」

「そう言う本って、いわゆる、ゲイ的な？」

「……ず、随分、ストレートに言うじゃないの……」

「曖昧なのは嫌いだからな」

って言うより元々俺らには性別がなかったのにそう言う本があるのがよく意味が分からない。同性愛って言っても、なんだかピンと来ない。そもそも性別があった時代の価値観が薔薇とか百合なら未だにその言葉があるのが理解出来ない。いや、言葉は言葉だから在っても良いが、それを理解出来る世代が少なくなっているのに、その言葉を使い続けているのって何でだろうと思う。

やっぱり世界はふたつだけなのだろうか。

男の世界と女の世界。

結局、生まれた時だけは性別ないままで、その後は後天的に周りの環境で性別が決まるから、そう言う世界になるのかも知れない。

このままならヒバリは女になるかもしれない。

そうなればどんな女子になるのだろう。

雪穂のように可愛い女子になるのか綺麗になるのか分からないが、どちらにしても俺はヒバリが好きだ。コレに性別的な差はないと思う。

仮にヒバリが男になったとしても、ヒバリならいいかなと思う。

良いかなって、何か上から目線になってしまったが俺はヒバリの内面が好きで少しガラス細工のようなが、その男でも女でもない純粋な心が俺は憧れて、抱きしめたいと思ったから、ヒバリが何の判断をしたとしても好きだと本気で言えると確信している。

△

私はヒバリが好き。

それは幼稚園の頃から変わらなくてずっとヒバリが性別無くって良いと思った。だって性別の無いヒバリはとっても可愛くって幼稚園の頃から私はヒバリが好きだった。あの子はお人形さんみたいに綺麗で、可愛くて、そして壊れやすいと思った。

ホルモンバランスが安定しているけど、その精神までは安定していないからよく『僕は男になりたい』とか『僕は女になりたい』とか急に泣きながら言い出すのだから私と夏樹はオロオロしながらもヒバリを慰めた。

あの子は一人称が僕だけど、その内面はどちらかと言えば少し女の子のようだ。

生理を迎えた女の子のように面倒くさくって、ナイーブになったりして、子宮がないくせに子宮のある女の子よりも、女の子みたいに沈んだりして。精巣がないくせに背伸びして少し男の子みたいな服装して来たり、なんだかヒバリってチグハグだけど、何となくその区別のない性別が不安なのかなあって思うと少しだけヒバリが可哀想に思ったけど、コレが母性なのかな？ 私はヒバリを護りたいと思った。

だから夏樹がヒバリと付き合ってるのかなって思ったら嫉妬した。

ヒバリがそれを本当に恋と認識しているのかは分からないけど、いつときの気の迷いだったとしても、ヒバリと夏樹が傷付く結果になったとしても、私はヒバリの為なら良いと思った。

「……でも、叶うなら」

ヒバリは私の方を向いて居て欲しいと思うのは私のわがままなのかな。

校門を潜りヒバリと夏樹が恥ずかしそうに手を繋いでいる。お互いに男子の制服で手を繋いでいる様子はそっちに見えるな。それはそれで萌えるのだが、こう言うとふたりに（主に純粋なヒバリに）引かれそうなので止めた。ちなみに夏樹に引かれようがどうしようが殴るのでどうでも良い

私は夏樹には容赦しない。

ヒバリには言った事ないが私と夏樹は中学一年の頃に付き合っていた。

二年の秋に別れたのだが、約一年の交際をしていてそれなりに楽しかったと思うのだが、何となく夏樹との恋愛は学生のノリ的なものに思えて、私の方がつらくなって別れてしまった。

あの頃からだろうか、夏樹がヒバリを意識するようになったのは。

他の男子はヒバリを男子とも女子とも見ていない。

夏樹とよく一緒に居るから若干男子よりの扱いかも知れないがみんなヒバリに触れたりしない。やっぱり性別がないとどう接して良いのか無意識な遠慮が生まれるのかも知れないが、それが、夏樹がヒバリと付き合うまでの私の平穏だった。

許すまじとは思ったのだがヒバリが手を繋いで幸せそうな様子を見ると、そんな嫉妬の炎は消えてしまった。

私はヒバリが好きだった……。

それだけで、十分だ。

この気持ちは大切な青春の一ページだったとして心に留めておこう……。

△

その日は雨だった。

僕は雨と言うのが好きではないけど、特別に嫌いと言う訳でもなかった。

傘に当たる雨音がまるでドラムのリズムのように奏でているのは聞いて居て楽しいし、それに車の通る音が少しだけ大きくなって、微かな湿気の匂いと共に、濡れた土の匂いがする。

とあるアニメ映画監督は雨の日は上空の匂いを運んでくると言うような表現をしたけど、僕は地上の匂いしか知らないから、それが空の匂いなのか、僕には分からなかった。

もしかしたら、僕が土の匂いだと思ったこの匂いが空の匂いなのかもしれない。

僕が飛行機の操縦士にでも……いや、これはもしもの話なので本気にしないで欲しいのだけど、もしそうなったら、確かめてみようかと思う……。

そこで思った。

飛行機の窓を開けたら気圧の変化で機体がバラバラになってしまう。

結局、僕の将来やりたい事と言うのは叶わずに終わりそうなので、このやりたい事はなしにしよう。

僕が将来の事を夢ではなくやりたい事とか居たのは、僕には夢と言うのがないからだ。

性別が欲しいと言うのは夢ではなく願望だ。

願望が夢ではないのかと聞かれたら、僕は答えに窮してしまう。

僕にとっての願望と言うのはまだどちらでもないのだ。性別が欲しいけど、それは、居場所みたいなものが欲しいだけで、別に僕はどちらになりたいと言う強い願いはなかった。ここにサイコロがあって、その出た目で決めても良い。

奇数なら男でも良い。

偶数なら女でも良い。

それくらい僕にとって性別は欲しいけど、強い願いではなかった。

僕って欲が少ないかも知れない。今なら仙人になれるかも……。

「なあ、ヒバリは女になりたいくはないのか？」

夏樹が言う。

なりたいたうとそうであり、そうでないから僕は言葉に困った。だから僕の答えを少し夏樹に託そうと思う。僕は狡かった。

「夏樹は僕が女の人になって欲しいの？」

夏樹の足が止まる。

思わぬ夏樹の行動に僕は五歩先に進んだ。そして止まった。僕の五歩うしろに夏樹が居る。

彼は泣きそうな表情をしていた。男なのに泣きそうな表情に僕は罪悪感のようなものを感じた。胸が痛み、心臓が突き刺さるようで、まるで氷柱のような痛みなのに僕のお腹は熱かった。

夏樹の表情が、苦悩に満ちた表情が愛おしかった。

僕は少しサディストかも知れない。

「俺は……お前みたいに性別が決まってない奴を知らない。好きになった人の性別で性別が決まるってのも正直仕組みがよく分かって居ない。元々性別無いのに何でそんな仕組みにしたんだろうって……って思ったら、生き物って本当に昔は性別がなかったんだってな。雌雄同体で、その環境で雄雌別れたり、たまに自家受精したりしているらしい。そっちの方が効率的なのに、どうして性別があるのかなって思ったんだ……」

夏樹は少し苦しそうだった。

「答えは見つかった……？」

夏樹は首を横に振る。僕はそっか。と言う。「遅れるよ……学校」そう言って僕は夏樹の

手を握った。

夏樹は僕を引き寄せてキスをした。

傘が地面に落ちて少し転がる。

僕は強く抱きしめられた。

「……もし、お前が本当に性別決めるの嫌ならそのまま良い。俺が決められなかったのは、決めたらお前がお前でなくなりそうで怖かった……。もしお前が女になったら、今のお前を否定したみたいで怖かった。もしお前が男になったら、この……壊れそうなお前が居なくなるんじゃないかと思った……」

夏樹はさらに強く僕を抱き締める。

「夏樹は僕をガラス細工のように壊したいの？」

僕は笑って言う

「逆だ。ガラス細工のように壊れてしまいそうだからこうやって傍に居たいんだ」

「ありがとう……」

でも、と僕は夏樹から離れる。彼は驚いたように僕を見ている。

「壊れやすいだなんて思わないで欲しい。僕は伊達に十五年間生きてないよ」

そう僕は彼に言う。

いつの間にか雨は止んで居た。

## 第五章

身体が少し重かった。起きるのがつらくって少し吐きそうだったけど、洗面所でひとしきり鳴咽と共に僅かな胃液をこぼしていたら少し楽になった。そのまま喉が痛くって、顔も少しむくんで居たからまるで二日酔いの人だなと思った。

いつになく白い肌が目立つ。ますますアルビノみたいだ。

「……………」

そこで違和感に気付いた。

いつもより服が当たっている箇所があった。触ってみると少し膨らんで居る。

僕は思わずを開いたボタンを閉めた。そのままうずくまってしまい、どうして良いのか分からなくなった。

少しずつ変わってきた身体に僕の心だけが取り残されていた。それでも、怖いけど嬉しかった。今まで何処にも居ないような気がしていたのに、急にここに居るんだって思うと涙が出るくらいに感動した。けど怖かった。嬉しいけど怖いと言う感情に僕は戸惑っていた。



「ふわぁ……おはよヒバリ——」

呑気に起きて来た母さんに僕は飛び掛かるみたいに抱き着いた。「うわぁ！！」と言う母さんに僕は泣きながら胸が出来たと言うと母さんは最初驚いて居たが、優しく「良かったわねえ……」と僕の頭を撫でてくれた。

その後、父さんも交えて僕に少しだけ性別が出始めたと言うのを報告したら「……そっかぁ、良かったな、ヒバリ……」と静かにしかし優しく笑みを浮かべてくれた。男の人はあまり感情を出して物を言わないけど、父さんも心底嬉しく少し複雑だったと思う。

「僕に娘が出来たんだなぁ……」

まだはっきりと性別は決まってないのだが父さんは感慨深くそう呟くように言った。

その日は学校を休んだ。

そのまま中村先生の所で精密検査をした。検査は半日かかり十五時によく検査結果まで出た。血液検査は研究機関に送り詳細なデータが後日分かるそうだが、とりあえずは「おめでとう、僅かながらだけど女性ホルモンの上昇を確認できたよ。男性ホルモンもやはり多いのだけど、まぁ、卵巣か子宮の形成がされるまではもう少しかかるだろうけど、とりあえず、一応君は女性って事になるね」と中村先生は言った。

「急だったね。何かあったのかな？ あ、ごめん、こういうのデリケートな質問だよな？ 良いよ、応えなくって……」

「夏樹と付き合う事にしました」

中村先生の言葉が言い終わるかどうかの所で僕は言う。

「夏樹君って君の幼馴染の？」

「うん……」

僕は長い付き合いだから思わず敬語が抜けてしまった。

「そっか……あ、なんか嬉しいなずっと子供の頃から見ていた患者がこう成長するってのは……」

「大げさだなぁ……」

「いや、良いじゃないか！ 僕にだって感慨深いものがあるんだよ！ 教え子が巣立つ感動みたいなものとか！」

「……うん」

「何そのドライな感じ！！ もう、この現代っ子め！！」

中村先生はそう叫んだが、やっぱり目に少し感動の涙が見えていた。

「あんた制服はどうするの？」

帰りの車の中で母さんがそう言った。

「え？」

「だって今まで性別無かったから一応男の制服にしたけど、今はあなた女の子に向かっているんでしょう？　なら、制服も女の子にした方が良くかなって」

「……………」

僕は悩んだ。

確かに僕は女の子に向かっているけど、今までどっちの性別でもなかったから、急に变えようかとか聞かれても、そんな簡単に応えられなかった。

「まあ、性別変わり始めなんて皆ナイーブなんだからゆっくりしたら良いよ」

「うん、ありがとう……」

母さんはそのまま何も言わずに車を運転していたけど、僕はまだ少し複雑だった。

△

「……似合っていない」

鏡を見ながら僕はそう思った。女子のスカートを穿いた髪の短い僕を僕は似合わないと思った。でも、女の子になった身体でやっぱり男子の制服が馴れているし安心するから、そのままにしようかと思ったらブラウスのサイズ少し変わったから駄目よと言われた。何のことかと思って試しに来てみたら、確かに胸の辺りがきつかった。

「あと、ブラも買わないとね」

そう言う母さんは三日ほど学校に休みを頂く手続きをしたあと、買い物で僕の下着を買わせた。

ほら好きな選びなさいと言われたけど、今までブラどころか下着も中性的なものしか着た事なかったから、こういうのに疎かった。

「今まで中性デザインの服って無個性感があって嫌いだったのよ。でも今は思いっきり女子の服買ってあげられるから、楽しいわ」

母さんは嬉しそうに僕よりイキイキと服を選ぶのだが、肝心の僕は複雑だった。

僕はまだ自分が女になったと言う事実を頭では分かっているけど、心が受け入れるのに時間が入りそうだった。そう、僕は夏樹の事が好きなのは自覚しているけど、それはあくまで僕が無個人的なまでに性別がなかったからだ。だから純粋に夏樹が好きになれたのに、

いきなり性を突き付けられて、無個性が個性になって、それに心が付いて行けてなかった。

性を持ったら僕の好きは単純にホルモンの支配を受けているみたいで、何となくそれは夏樹に失礼な気がして、僕は女になったと言うのを素直に歓迎できなかった。

……けど……感動はしていた。

僕は性を受けたあの日の夜に家のトイレでひとり泣いた。

今まで僕は浮遊した感覚に居た。誰よりも自分が浮遊していて何処にも居ない気がして、それでもみんなが少しずつ性別的な変化をしていくのに僕はずっと僕のままで、まるでずっと僕だけが停滞している子供みたいに思えて、まるで冷たい氷の牢獄に居るみたいで、僕だけがそこに居るような感覚に陥っていた。けど、それでも性を持つのがどうしても怖かった。

僕は性が欲しかったのに性を持つのが怖かった。

どちらかに着くことが怖かった。どちらかになるのが怖かった。区別されるのが怖いくせに、この浮遊感がもっと怖くって、でも何処かに着地するのも不安だったのに、身体が勝手に心とは勝手に着地する場所を決めて、それはそれで不安だったのに、いざ着地すると不思議と安心した。ここに居て良いのだと、ここに居て良いと言われた気がしたのに、そこに居て良いと言われると今度はその変化に戸惑って、今度はそれが怖かった。

女の子になったのが怖いなんて、なんて贅沢な悩みだと思った。

「あんた着たい服とかないの？」

「え？」

急に現実に戻された。

僕は紫色の縞模様のブラを持って居た。

「せっかく女になったのに着たい服とかないの？」

「……今までじゃダメ？」

僕は何故か泣きそうになった。

何で泣きそうになったのか分からないけど何となくここで良いのかと不安になった。

今まで僕は浮遊感に不安になったのに、今はあの浮遊感が幸せだと思った。

コレじゃまるで不安なのが安心する人みたいだと思うけど、僕はそう言う人かも知れない。

不安な事に安心する人は一生幸せを享受できないと思う。

自分がそう言う人だとは思った事はないけど、もしかしたらそうかも知れない。もしそうなら母さんに、父さんに申し訳が立たないけど、どう申し訳を立てたらいいのかも分からないから、僕は怒られたら困った子供みたいな顔をするしかないけど、幸か不幸か母さんは僕を叱りはせずに、困った顔をした。……ごめんね。

「あなたがそうしたいのならそうすると良いわ……」

母さんはそう言った。

## 第六章

「ええええ！！ 女の子になっちゃったの！？」 雪穂は女の子になった僕を見て素直に驚いて居た。

僕の変化にクラスの皆は動揺したりしていたけど、でも元々僕らはそう言う存在なのに、こんな風に成長してから性別が変わる事に対して、どうして、こう不思議がられるのか僕には少しわからない感覚だった。

「ええ、ヒバリは女の子になりたかったの……？」

何故か困惑する雪穂は僕の両腕にしがみ付きながら言う。

……なんか嫉妬してる？

「え、うーん、分からない……。けど、雪穂みたいに可愛くなれたら良いなあとは思って居たよ」

「え、え！？」

雪穂は何故か顔を紅くした。

周りの女子が何故か騒めく。

「えっと、ヒバリは女の子になって夏樹君と付き合っていて、女の子も好きって事？」

「え、それってレズって事なの？」

「両方ならバイセクシャルじゃないの？」

「バイなら逆に男の子の方が萌えるわ」

「『『わかるわ～！！』』」

分からない。

その感覚は本当に分からない！ あと、なんの話しなの！？ え、僕で変な話ししないですよ！！

僕は心の中で抗議の叫びを上げた。

「うう～、何であなたの方が胸大きいのよ！！」

「え？ あの……ごめん……」

「謝るな！！ 余計惨めになるわ！！」

怒る雪穂。僕にどうしろと言うんだと思ったけど、そう言ったら火に油を注ぐ事になりそうだからやめた。

△

「……お前女になったんだってな」

昼休みになってようやく僕は夏樹と話が出来た。夏樹には LINE で女になったと言うのを伝えたけど、既読だけで返事はなかった。嫌われたのかと昨日の夜は少し泣いたのだが、夏樹の登校した姿を見て少し安堵した。

でも、クラスの皆から色々と質問されたり、誰を好きになったのとか聞かれたりして学校に名前はどうか聞かれたりして色々あって夏樹と話すのが昼休みまで掛かってしまった。

雪穂は雪の中でも穂を変わず立てて欲しいと言うご両親の願いから自分で決めたらしい。夏樹はそのまま、ご両親が性別決まったら付けたかった字を当てたらしい。

僕の両親はそこを決められなかった。

元々、雲雀と言う漢字が好きで着けたらしいが成長したら子供が欲しい名前でも戸籍を更新する予定だったのだが、僕がこの名前が好きだから漢字もそうしたら良いよと言ったのだが、両親は雲雀と言う字は好きだが名前となると他の字を当てたいと言った。そこでヒバリと読める漢字を幾つか探したのだが……。

僕はこのヒバリと言う名が好きだった。日本には名前に必ず漢字を当てないといけないと言う法律はないから、このままで良いと思ったけど、通例的に性別が決まったら漢字を当てると言う風習に両親は染まっていて、長い間性別がなかった僕にとってはその風習に馴染みがないけど、もしかして幼い頃から性別があったのなら馴染んだかもしれない。

「うん……」

僕は頷いた。

「俺が好きって事で良いのか……」

夏樹は少し不安そうだった。

僕は頷いた。

「そっか……」

夏樹は安堵したように溜息を吐いた。

「はああ……」

「！？」

夏樹は急にうずくまって深く長い溜息を吐いた。

「ど、どうしたの！？ 大丈夫！？」

「いや、なんか……俺のせいで女になったのかなあって思うと責任感じて……」

「え……」

僕は胸が痛んだ。

それって、僕が女になったら嫌って事？

「って、おいおい！！ 何悲しそうになってんだよ！？」

「だって、僕が女になったら嫌なのって思うと……」

「ち、違うって！！ 確かに今までヒバリが性別無くてビックリしたけど、別に嫌じゃないって。てか、ヒバリが男でも女でもどっちでも好きだし！！」

そう言って夏樹は僕に抱き着いた。

僕は驚いたけど、その夏樹の大きな背中に手を回していたら落ち着いて、安心して、僕は安堵の溜息を吐いた。

## 第七章

階段の踊り場で密かにキスをするヒバリを見て声を殺して泣いた。口に手を当てて、声出さないように泣いた。込み上げて来る悲しさは寂しさなのかヒバリを夏樹なんかに取りられた悔しさなのか、私には振り向いてくれなかったヒバリへの失望からなのか分からないけど、それでも、ヒバリが夏樹を好きになれたと言うのには嬉しかった。夏樹が好きだから女の子になったんだよね。良かったね。でも、ごめんね……。素直に祝福できないや……。やっぱり私はヒバリが好きで、朝起きて、顔を洗っても、登校しても、普通に授業受けても、家に帰ってもずっとずっとヒバリの事ばかり考えている。

ヒバリが女になった。それなのに私は相変わらずヒバリが好きだった。

女の子になっても変わらず私はあなたの事が好き、あなただけを見て来た。出来れば私と付き合って欲しかった。夏樹なんかじゃなくって私を見て欲しかった。お願い……。

夏樹と別れて私と付き合って欲しい……。

「……何を言ってんだろ私……」

私は自分の心の汚さに驚いた。

階段の壁に背中を押し付けて私はゆっくりと座った。額を抑えて、眼を隠すように深い溜息と共に私は涙を伝う心と反比例して綺麗なひと滴を拭う事なくその場に沈んだ。

△

「お前もっと可愛いカッコしろよ」

下校時間、夏樹は不満そうに言う。何で？ と聞くと夏樹は少し恥ずかしそうにしていた。

「だって、女になったんだろ？ もっと可愛いカッコしろよ」

そう言うのだから僕はクスッと笑った。

「夏樹は可愛いね」

「はぁ！？ 俺が？」

「うん、なんか可愛い」

「なんだそれ？」

そう言って夏樹はキスをしようとするのだが、僕は近付く夏樹の顔を遮るように顔をそむけた。何だよ？ と夏樹は不満そうだったのだが、僕は周りを見渡す。何人かの生徒が遠慮がちに僕らを見ている。女子がキャーと言い、男子生徒がニヤニヤしながら見ている。それ以外の内気な生徒は顔を向けないようにしているけど、眼は僅かにこちらを見ている。

女性は視線に敏感だと言うらしいけど、僕は完全に女性になる前からこういう視線に敏感だった。っていうか、夏樹も場所を選んで欲しい。

「夏樹、場所を選ぼうよ」

「……あ、わりい」

一瞬苛立った夏樹だが周りの視線に気づき居心地が悪そうにしている。

「夏樹も思春期してるね」

「なんだよそれ……」

夏樹はそう言うのとふたりしてなんだか可笑しく思えて笑った。

「くそ、……可愛いかな」

「え、あの……ありがとう？」

「少しは謙遜しろよ」

「こういうのは謙遜する方が嫌われるんじゃない？」

「ち、増々女子化しやがって」

「うん、女性ホルモン多くなったからかな？」

「ちげえよ、元々そう言うところあったんだよお前は」

何故か怒っている夏樹。

「夏樹、怒ってる？」

「いや、だから、その仕草！！ くそ、俺ちょっと頭冷やしてくる！！」

「え、何処行くの待ってよ！！」  
急に走り出した夏樹を僕は慌てて追いかけた。

何だよ、あいつのあの可愛さは！！ 元々性別無い時から可愛かったのにあの首を傾げる仕草とか流れるような短い黒髪もシャンプーも普通の使っているはずなのに、性別無い時からあいつの匂いとか好きだったし、たまにすムラっとくるし、男物の制服着ているのにあいつの顔思い出しながらオナニーだってした事あるし。やった後にすげー後悔したし、友達相手に発情したとか少し気まずいし、すげー死にたくなっただし。でも、あいつが女になって、やったって思った。

あいつが男でも女でも好きだって言って置きながら、男になったらどうやって付き合おうとか本気で考えていたし、どうやって、周り黙らせようとか考えて居たら知恵熱出て来たし、そしたら、あいつが LINE で『ごめんね、急に。今日、学校休んで病院で精密検査して居たら、女性になって、性別決まったんだ……。その報告だよ〜』って来て。

あーもう！！ 俺こんなに悩んで居る時に急に答え出して来て、俺もうこの感情何処に向けたらいいんだよってなって、そしたら、急にムラムラして、処理して、そしたら学校であいつの顔見れなくなって、でも、話さないといけないから言ったら、やっぱり俺のせいで女になって居て、少し責任感じたけど、でも社会的に付き合うってハードル下がって、少し安心したのも事実だった。

「ああ、もう！！ 俺ゲスいなあ……」

「はあはあ……、下水？？ 下水がどうしたの？ はあはあ……」  
驚いて振り返るとそこにはヒバリが居た。聞かれた。そう思った。

「意外だったよ」

「ごめん、今のは……」

「そんな社会的な事に関心があるなんて」

「うん、実は、ごめん、そうなんだ……。ん？」

アレ？ なんか可笑しくね？ なんか話しが噛み合っていないくね？

「てか、もう、足速いよ。はい、鞆。もう、夏樹途中で落としていたよ」

「あ、ああ……ありがとう」

そう言ってヒバリから鞆を受け取る。

ふたり分の鞆持ちながら追いかけて来てくれたのか。なんかキュンとくるな。

「ね、ちょっと休ませて。何だか喉乾いちゃった」



そう言ってヒバリは近くの公園のベンチに座った。

俺は自販機でコーラを買った。

受け取るヒバリ。わずかに細い指が触れる。温かい。走って来たヒバリは白い肌に似合わずに温かかった。

「本当は水が良いなあ」

「自分で買え」

「ひどいなあ、僕彼女でしょ？」

「今更、女になるなよ。無性別の頃からどっちになれば良いんだって悩んでいた癖に、急に性別決めやがって」

「ごめん、でも、僕だけが決めた事じゃないよ」

「他に誰が？」

ヒバリは俺を指さす。やっぱりな。

「責任取ってね」

そう言うヒバリは悪魔的な笑みを浮かべた。

## 第八章

ヒバリが女の子になった。

それは嬉しい事だ。ずっと性別無くって悩んで居たあの子がようやく見つけた自分の居場所を祝福すべきなのに、私は素直に喜べなかった。どうしてだろう？ ヒバリが好きなのは夏樹で、付き合っているのも夏樹で、ようやく見つけた性別をあの子はきっと私よりも女の子を楽しんでいくだろう。これから生理で悩んだり、女子トイレに入らないといけなから少し戸惑うかもだけど、そういうのを教えて行くのは楽しい。私が女として先輩なんだよって少しだけ胸を張れる。けど……。

やっぱりヒバリ……私はあなたが好き。

幼稚園の頃からあなたの事が好きだった。

あの頃からあなたは可愛かった。あの頃は本当にみんな楽しかった。性別なんかなくて、みんなで一緒にトイレに向かうし、一緒にお風呂にも入ったりした。性別がどうだとか言う大人の区別に縛られずに、自由に生きられた。

でも神様ってひどいよね。せっかく自由だったのにいきなり十五歳になったら性別決まなさいとか、本当に何を考えているんだか……。

『人は大災害と度重なる戦争によって、いつしか性別と言う区分を捨てました。これは子孫繁栄の新たな進化だと言う人も居ます』保健体育の授業でそんな事を先生から教えられた。

「子孫繁栄が目的……」

文科省はそう生徒に教えたがり教育機関はそれに従う。大人だって元は性別無かったのに、なんで性別をはじめから持って居るかのように振舞い、性別がないのを恥じるのだろう

う……。

「子孫繁栄が目的なら何で好きになった性別で自分の性別が決まるんだろう……」

それなら両性具有の方が良いに決まっている。そっちの方が都合がいいはずだ。それなのにわざわざ後天的に性別を決めたのって……。

私は枕を抱いてベッドに横になったまま天井を見た。

「神様って……もしかして意地悪？」

## 第九章

「クシュン！！」

浴槽で天井からしたたる滴でヒバリはくしゃみをした。

まさか雪穂が自分の事を考えているなんて夢にも思っただけでなく、ただ少し湯冷めしたかなって思う程度だった。ヒバリはお風呂が好きだ。性別無い頃もヒバリはよく長風呂をしていた。お風呂に入っている間は余計な事を考えずに済むし、気持ち良いお湯の波に揺られながら居ると、色々と疲弊した心が回復していくような気分になる。

それは気のせいじゃ無いと思う。

本当に回復して言っているんだと思う。皆が性別を持つ事に焦り、もがきながら、それでも性別を決められなかったあの頃はずっと何かに追われているようで、それは決してヒバリに追いついて来ないけど、追いつかれてしまうかのような怖さにヒバリはずっと追われていた。

でも、今は違う。

性別を持った。あまり意識せずに女性になったけど、少し戸惑ったけど、ようやく手にした性別は、まるで初めてここに居て良いと言われたように居心地が良かった。

ヒバリは浴槽から出た。

鏡には胸のあるヒバリが居た。思ったより細くならなかった腕を見て少しがっかりした。ヒバリは痩せている。それ以上痩せる必要を感じないほどに。それでも、ヒバリは自分がもう少し太った方が良くかなと思って居た。

ほんの少しだけでも脂肪が付いたら、それを憎むように燃やす。以前ならそう考えていたヒバリだが……。

「まあ、いっかあ」

女の子になったヒバリは意外と気にしなかった。

今までのストレスだったのかもしれない。意図せずにヒバリの痩せる事への執着を和らげた夏樹はヒバリにとって恩人になった。

ヒバリは気付いていないけど……。

「本当に女の子になったんだなあ……」

ヒバリは自分の身体を見てそう実感した。

大きくなって少し邪魔なおっぱいをヒバリは触れる。柔らかいのに張りがある。ウエストを触る。お尻を触る。……アソコは少し抵抗が合ってまだ触れていない。トイレの時は別だが、それもトイレットペーパー越しで、まだ直には振れていない。

「……ここはまだ勇気が要るな」

ヒバリはそう思った。

## 第十章

俺は子供の頃から男になるつもりだった。

父親はヒーローものを俺に良く見せたり野球をテレビで見せてくれたし、サッカーも好きだったから小学校の頃はよく試合にも連れて行ってくれた。母親は俺を女の子にしたかったらしい。男の子って勝手に育つからつまらないとの事だ。ひどい話しである。

俺は中学に上がる頃には完全に男になっていた。ユキはこの当時まだ性別が決まって居なかったが充分女子だった。仕草が雰囲気は女子のようで、性別無くとも俺はユキが好きだった。

「あー、サイテー夏樹！！」

家に来たユキはベッドの下にあったエロ本を見付けてしまった。探すなよって俺は少し思ったが言わなかった。

「おい、見るな！！」

「うわ！！ 巨乳が好きなの！？ 何コレ、えっろ！！」

「見るなって！！」

俺はユキからエロ本をひったくり身体の後ろに隠した。もう意味はないけど、何となくそうした。コレでユキが男子になったりしたらどうしようかと思ったが、そんな事は無く、ユキはそのまま中二の頃には女子になっていた。しかも結構可愛い。

▽

中学の放課後。

「夏樹はさあ、私の事好き……？」

急な質問に俺は足を止めた。河川敷で野球をしている小学生の声が響く。

「私の事好き？」

再度、雪穂が同じ質問をする。俺は応えをどうしようかと思った。正直、付き合っているようなそうでないような期間を一年以上続けて来て、急にこんな応えを求めるような質問は正直ずるいと思った。

「……好きだって言ったら、俺と付き合ってくれるのか？」

「いいよ」

雪穂は頷く。

俺は中学生の分際でロマンチックさを演出したかったけど、その時したキスはひどく下手くそで、今でも上手かは分からないけど精一杯のキスをした。

ひゅーと野球をしていた小学生たちが茶化す。うるせーと怒鳴ったら逃げて行った。代わりに雪穂が泣いていた。何で泣くんだ。そう聞くと嬉しいから泣いているんだよ、バーカと言われた。

女って分かんね。

よく父親が言うセリフだが、その日初めて実感した。

「女って分かんね……」